

八ヶ岳・阿弥陀岳広河原沢の植物採集

名 取 陽

昭和56年7月4・5日、長野県植物研究会の例会（第84回）が、八ヶ岳西麓の阿弥陀岳広河原沢で行なわれた。参加者は、大塚孝一、大塚美智子、小口好久、上条重利、上条京子、北村英一、清水建美、清水健、田代宏、田中茂、馬場多久男、平林陸男、古谷義人、古谷芳枝、堀米富平、望月精一、和田清の諸氏と幹事名取の総勢18名で、天候不順時の採集会であったが、盛会であった。阿弥陀岳広河原沢は、八ヶ岳の主峰赤岳南西面を深く刻んだ立場川に流入する、阿弥陀岳西南面からの支流である。下部はカラマツ植林の代償植生であるが、中流部からはシラビソ、コメツガを中心とする亜高山帯葉樹林となり、上部は、新生代第3～4紀にかけてフォッサマグナ地域に噴出した八ヶ岳火山の、安山岩系の熔岩と集塊岩の岩壁がとり囲んだ狭い沢となり阿弥陀岳山頂へせり上っている。今回は、長野県植物誌作成のための調査もかね、植物採集が可能な原村の区有林であるこの地域で採集観察会が行なわれた。

第1日・7月4日。あいにく雨天であったが、夕刻までに当日参加者を除く8名が、富士見駅近くの民宿、富士見高原荘に集合した。夕食時には、多少のアルコールも手伝い、楽しい自己紹介や歓談が続いた。前週に、幹事と下見に同行していただいた富士見小学校の横内文人先生に、明日のコースの主な植物についての説明をしていただいた。夜更けても外の雨音はやまず、明日の成果が案ぜられた。

第2日・7月5日。心配された雨も明け方には止み、天候も回復しそうな雲行きである。早朝松本からかけつけた清水先生や、地元の当日参加の方々も勢ぞろいして、7時45分には車6台を連ねて出発した。標高1000mあたりの八ヶ岳東麓に広がる高原野菜畑の中を通過し、標高1200～1300mのアカマツ林やカラマツ林の中に点在するペンション村を過ぎる頃には、霧も切れ、明るい青空も見えて来て、一行の意気もあがる。一面のカラマツ植林地を区画した別荘地をぬけ、標高1600の地点で車を駐車した。ここで、当日参加の人達も自己紹介され、清水先生から、長野県植物誌の調査票の記入のしかたや標本採集についての説明もあって、身支度を整えて、9時に広河原に向けて出発した。この頃には、頭上に阿弥陀の山頂も望まれ、眩しいほどの夏の太陽も顔

を出し、上々の採集日和となった。しばらくは、カラマツ植林の代償植生の間の工事用道路を行く。一見何もないような林床でも、ヒトツボクロ、カラフトミヤマシダなどの珍品が見つかる。ベニバナイチヤクソウ、グンナイフウロ、イブキジャコウソウなどの花も美しい。標高1700m付近で植林も終り、シラカンバ、ダケカンバ、シナノキ、ミヤマザクラ、シウリザクラ、イボタヒョウタンボク、ヒロハヘビノボラス、チョウセンゴミシ、ミヤマタタビ、ヤブサンザシ、シロバナヘビイチゴ、フジアザミ、ササバギンラン、マツムシソウ、イワハタザオなど見られる。標高1800m付近で車道も終り広河原に出る。このあたりは、見事な天然カラマツ林で県の採種用母樹林の標識も見られる。両岸には、シラビソ、コメツガ、ウラゲハクサンシャクナゲも現われ、亜高山帯の雰囲気も濃くなる。見事な花盛のミヤマハンショウヅルが見つかり、格好の被写体となる。ミヤマカラマツの白い花も美しく、ザリコミ、コマガタゲスグリ、ツバメオモト、ミヤマエンレイソウ、クルマバツクバネソウ、ユモトマムシグサ、セリバシオガマなど、河原には、ヤマガラシ、ヤハズハンノキ、ミヤマハンノキなど普通に見られるものの他に、

シロウマオウギ、ヨツバシオガマ、ムカゴトラノオ、ミヤマオトコヨモギなど高山帯から降下したものも多く見られ興味深い。広い河原の終る標高1900m付近で昼食。そこから上部の岩壁には、ニョホウチドリ、コキンレイカ、ホソバヒメジャシン、イワヒゲ、クロクモソウ、キバナノコマノツメなどが見られた。標高2100m付近で折り返し、マイペースで下山した。上記の他にスミレは、ヒメスミレサイシン、エゾアオイスミレ、エイザンスミレ、ニョイスミレ、マダラタチツボスミレ等が見られ（望月氏確認）、シダはミヤマウラボシ、ヒメイワトラノオ、タカネサトメシダ、キタノミヤマシダなどが見られ特にキタノミヤマシダは八ヶ岳では初確認（大塚氏確認）であって。下山途中、八ヶ岳山麓で国外よりの導入山草の順化栽培に当たっておられる、本会会員の森和男氏の栽培園を見学させて頂き、チベット、中国、南米等世界各地からの数千鉢もの珍しい山草を前に、豊富な経験談をお聞きし、一同深い感銘を受け午後5時30分、楽しい採集会を終えた。